

わたしの 世界の おすそわけ

Vol.6 まちあるきに関わる方々のおすすめ本展示

2024年11月1日（金） - 11月24日（日）

金沢市立玉川図書館 1F

本はいろんな世界の入口です。金沢で活躍しているあの人はきっと、いろんな面白い世界を知っているはず。本を通じて自分の知っている世界を少しだけおすそ分けしてもらえたら、ここを訪れる様々な方が新しい世界に出会うきっかけになると思います。もしかしたらその出会いが、未来の金沢で活躍する人を生むかもしれません。

今月は、まちあるきに関わる方々におすすめの本を聞いてみました。是非手に取って、読んで、新しい世界に触れてみてください。

赤池 佳江子

●イラストレーター

『ひとり居の記』 川本三郎

評論家である川本三郎さんの 2013 年から 2015 年の日々を綴ったエッセイです。猫と鉄道が好きな川本さんらしく、街ネコの写真展を福島県いわき市まで常磐線に乗って見に行く話から始まり、その街で良い感じの居酒屋を見つけて一杯。一つの出来事から映画のこと、音楽のこと、鉄道のことなどへ次々と派生していく様々なエピソードは読んでいて飽きません。本の後半には、私の個展に来て頂いた時のことも綴られていて思い入れのある一冊です。

『『瀬東綺譚』を歩く』 唐仁原教久／画・文

私の師匠であるイラストレーターの唐仁原教久さんが永井荷風の視線を辿りながら綴った画文集です。昭和 20 年の東京大空襲で焼失した玉の井。現在の墨田区東向島周辺を歩きながらそこにあったであろう路地や人々に想いを巡らせ浮かび上がった風景が描かれています。戦前の色街の妖しさが匂い立つような絵はどれも見応えがあります。

『ヨーロッパぶらりぶらり』 山下清

ちぎり絵でよく知られている山下清氏ですが、ペンで描く線画もとても力強くかつほのぼのとしていてとても好きです。正直で忌憚がない文章は微笑ましく、ユーモアに溢れています。旅先でもスケッチしていますが、帰国してから描いた絵が多いのだそうです。その方が落ちついて描けるからだそうで、私もその気持ちはよくわかります。前作の「日本ぶらりぶらり」と合わせて読むのもおすすめです。

落合 博晃

●金沢 21 世紀美術館広報課職員

『平成加賀万歳』

田中久雄

金沢に江戸期から伝わる「加賀万歳」。その演目の中に「まちあるき」そのものを歌詞にしたものがある。例えば「金沢町尽くし」は旧城下の地名をテンポよく街中を歩くように唄ってゆく。また「北國下道中」は加賀から江戸までの参勤交代の道中の宿場や名物などを紹介する道中案内だ。著者は市街や街道を実際に歩き万歳の歌詞を解説しつつ、現代の情景などを紹介する。いわば万歳の演目が、江戸期のまちあるきガイドだったことにも気づく。

『東海道新幹線の車窓は、こんなに面白い！』

栗原景／著・撮影

東海道新幹線に乗るたびに気になりますか？「727」の看板。そんな車窓の風景の謎に答えてくれる一冊。今年開業 60 周年を迎えた新幹線。やはり新幹線は「東海道」だと思ふ。通過するのは日本の戦後復興と高度経済成長を支えた「太平洋ベルト」。右に富士山、左に海を見ながら次々変化してゆく風景。車窓から見える気になる正体不明のオブジェや建物...。「あれ何?」その謎が解決される。東京から大阪までの 3 時間弱、車窓からの「まるちあるき」ガイド。

『江戸切絵図散歩』

池波正太郎

著者は言わずもがな、時代小説の大家である。彼のエッセーに加えて、切絵図、江戸名所絵図、浮世絵、著者自身のスケッチ、発刊当時の写真を掲載。浅草生まれの著者の東京というまちを見る温かいまなざしが感じられる。そしてその視線の先には常に江戸が顔を出す。上梓された当時から今日に至るまで加速度的に東京の街は変化し続けているが、あえてこの本片手に江戸を探してまちを歩くのも悪くない。平蔵や梅安に出会えそうな気さえしてくる。

越田 皓太

●飲食店（おでん よし坊）

『マニア流！まちを楽しむ「別視点」入門』 別視点／編

まちの中にある、「路上園芸」「電線」「片手袋」などの何気ないもののマニアの「別視点」をインストールし自分なりのフィルターを通し新たな自分だけの「別視点」を見つける手引書。自分とは違う様々な背景を持った人々ならではのまちの目線を普段から意識すると、まちが今ままでとは違う見え方がして、視野だけではなく価値観も拡張されます。人の別視点を発見して人の「好き」が自分の身体に混ざる感覚は幸せ。

『まち歩きが楽しくなる水路上観察入門』 吉村生、高山英男

地下に埋没した水路を指す暗渠。複数の暗渠に関する著書があり金沢でもワークショップを行われているお二人のそれぞれのアプローチによる暗渠とそこからの路上観察の入門書。暗渠の本場である東京の事柄が中心ですが、金沢も用水のまちとしての歴史があり、目線を普段より落とし古地図アプリを片手に耳をすませながら歩くとうつろいと生活の堆積を感じられる暗渠が多数あり、水路と歴史の流れをダイレクトに感じられる。

『たのしい路上園芸観察』 村田あやこ

市井の人々の生活を彩ろうとする工夫を見たり、その遍歴を想像することに愛おしさを感じる人や、そういった工夫にコントロールされきれなかった緑の力をみたい人におすすめの一冊。路上で営まれる園芸や、人の手を離れ路上が育む園芸を村田さんの優しい目線で収集しユーモアを交えて分類されています（転職鉢 / どさ草 / 植物のふりをした妖怪など）。個人的には P 箱を土台に活用した園芸が大好きです。

オリヴィエ・ミニョン

●エディション制作・出版・アートスペース運営 (Keijiban)

『パサージュ論』 ヴァルター・ベンヤミン

シュルレアリスムのモンタージュのように配置された断片からなる本書で、哲学者ヴァルター・ベンヤミンは、近代性の発展について考察するためにパリの街を見ています。彼の分析モデルには、「パサージュ」（屋根付き商店街の先駆け）や、ボードレールに触発された「フラヌール」（哲学的観察者であり都市の散歩者）の姿があります。

『散歩もの』 久住昌之／作 谷口ジロー／画

今日、人気のある日本のマンガはすぐに翻訳され、流通し、ヨーロッパの若者の多くが読んでいます。しかし 1990 年代にはまだ興味を持つ人はそれほど多くはなく、不思議なことに、手に入るマンガは『アキラ』と谷口ジローの本に限られていました。その後、私が日本に来たとき、谷口氏が自国ではほとんど無名であることを知って驚きました。（テレビドラマ化された『孤独のグルメ』以来、それは多少変わったかもしれませんが。）私が 16 歳の時に彼の著書『歩く人』を読んだ時、ストーリーも言葉もほとんどないこの本に大きな衝撃を受けたことを今も覚えています。

『パリの片隅を実況中継する試み—ありふれた物事をめぐる人類学』

ジョルジュ・ペレック／著 塩塚秀一郎／訳

1974 年 10 月 18 日、ジョルジュ・ペレックはパリのサン・シュルピス広場のテラスに座りました。その日から 3 日間連続で、時間帯を変えながら、通行人、公共交通機関、建築物や路上の設備、微小な出来事、光の変化、落とし物など、目に入るものすべてを記録しようとしていました。コンセプチュアル・アートのようなこの短編は、他に類を見ません。

中谷 裕一郎

●金沢市職員

『まちの見方・調べ方』

西村幸夫、野澤康／編

本書は、地域づくりの応援を目的とした地域調査法の入門書である。調査法というと堅苦しく感じるかもしれないが、本書はまちの見方や調べ方について現場主義を基本としながら、現地調査の前に行っておくべきことや現地に赴いて実際に調査を行う方法などが解説されている。本書により、事前にまちを調べたうえで「まちあるき」を行うと、まちの風景を楽しみながら歩くことができる。

『金沢を歩く』 山出保

金沢のまちづくりに長年携わってこられた元金沢市長である山出保氏が、金沢のまち、歴史、文化を歩きながら、奥深い魅力を伝えている。「まちは市民の手に成る芸術作品」であるとされており、本書を読んでから金沢のまちを歩くと、普段見慣れた風景の中に、様々な芸術作品があることに気づくことができる。

『地域のみかた ー文化的景観学のすすめー』

文化的景観学検討会／編著

日常の何気ない風景は、地域の人々の生活や生業など、歴史の積み重なりの結果であり、日頃その価値にはなかなか気づきにくいものである。本書では、日常の風景に隠された文化的な価値の見方を、図解や写真を用いて分かりやすく解説しており、風景の魅力に気づかされるとともに、地域らしさを活かしたまちづくりの手法についても示されている。

下坂 裕美

●建築士（川川）

『10:04』 ベン・ラーナー／著 木原善彦／訳

「僕」はニューヨークの街を歩き続ける。歩くことで意識は体を離れ、過去／未来にタコの触手のように接続し「ほんの少し違う」ものに変容させていく。その一歩ごとに大動脈からハリケーンまでが地続きになる。このように歩くことそのものの叙述により展開する文学はフラヌール小説と呼ばれ、W・G・ゼーバルトを嚆矢とする。本書と同じくその流れに連なるテジュ・コールの『オープン・シティ』もまた、世界の変容を遊歩する一冊として併せておすすめしたい。

『東京の地霊』 鈴木博之

たとえば十字路の対角線に建つ二つのファミリーマートは、きっと交換可能ではない。それぞれが固有の場を持ち人を孕むからだ。そんなことを思うのは、都市史を専攻したばかりの頃に本書を読んだことが大きい。読み解かれる土地はどれも地誌に刻まれるような出来事をその地霊として纏う。でも特別な歴史を持たなくともどこにでも地霊は存在し、そして今この場所を歩く私たちもその一部かもしれないと、読めば思える。人の営みとの交感の中で、土地は連想し、流動していく。

『河原にできた中世の町ーへんれきする人びとの集まるどころー』

網野善彦／文 司修／絵

まちを歩くときには、そのほんの断片しか目にすることができない。しかし足下では、土地が蓄えてきた記憶の層がどこまでも集積する。重力と壁のなかで、私たちはそれを想像することができる。この絵本の主役は川だ。それも先史時代まで遡り、流れの一断面を見開きごとに展開する。金沢もまた、二つの川の流れるまちだ。この本を読み川の側から見れば、現代都市の秩序や論理を超えて、もっと深い広がりやの端に今ここ、があることを感じられるかもしれない。

松田 哲夫

●路上観察学会

『編集を愛して』

松田哲夫

編集とは何か？ただ赤字を入れるだけではない！松田哲夫の生き様が示すのは、原石のような素材を見つけ出し、その輝きを引き出すまで共に歩む姿勢だ。松田を取り巻く水木しげる、鶴見俊輔、赤瀬川原平、藤森照信という独自の個性たちが社会に活かされるのも、彼が本という形で世に送り出す仕事があってこそ。本づくりは、著者だけの役割ではないのだ。

『全面自供！』

赤瀬川原平／著 松田哲夫／聞き手

千円札裁判、超芸術トマソン、路上観察学会…。趣味と仕事を行き来しながら「いくつもの電極の入り乱れたカオス生活」を宇宙のように膨張させた赤瀬川原平の、おねしょ少年時代から現地点に至るまでをつまびらかにする一冊。聞き手は30年以上赤瀬川と共に歩み続けた編集者の松田哲夫。常に新しい地平を切り拓いた赤瀬川の人物像が、旧知の松田との対話により飾り気なく浮かび上がる。装丁は南伸坊。

藤森 照信

●路上観察学会

『建築探偵の冒険・東京篇』

藤森照信

ぼ、ぼ、ぼくらは建築探偵団！街の奥にひっそりと佇む歴史的な建物を見つけ出し、次々とマーキングしてく。ホシはどこだ？時には危ない橋を渡り、庭からこっそり忍び込むことも…。そんな大胆不敵な建築探偵は、建築史家・藤森照信と堀勇良の二人によって結成された。活動は70年代の東京から始まり、当時はまだ見向きもされなかった近代建築の価値を掘り起こし、日本全国で再評価の波を巻き起こしていった。これは、スリル満点の建築探偵を綴った、藤森流の冒険記。

こちらの書籍リストはご自由にお持ち帰りください。
インスタグラムで過去の展示の様子もご覧頂けます。
instagram@watahinosekainoosusowake

